

〈礼拝説教〉 2009 年 6 月 7 日

あなたが美しくすべきものは？

マタイによる福音書 15 章 1—9 節

イザヤ書 29 章 13—16 節

武田 真治

一、エルサレムからの使者

マタイによる福音書は、15 章からまた新たな展開が始まります。

その幕開けが 1 節にあります。

即ち『そのころ、ファリサイ派の人々と律法学者たちが、エルサレムからイエスのもとへ来て』
です。

「エルサレムから」と敢えて記されているということは、彼らが公式にユダヤ教当局から遣わされて来ていることが分かります。その目的はイエス様の調査に他ありません。

かつて、洗礼者ヨハネのもとにも『エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させた』（ヨハネ福音書 1 章 19 節） ことがありました。今回も同じであったと想定できます。逆に言えば、イエス様というすごい人物がいるという「うわさ」が、とうとう当時の都エルサレムまで鳴り響いたということでしょう。それでそのうわさの主であるイエス様という人物について調査をするようにとの指令を受けて当時の宗教の専門家である「ファリサイ派の人々と律法学者たち」が遣わされたということです。

二、食事の前に手を洗わないのか

しかし、その彼らがイエス様の許に来て、最初に目について疑問に思ったことは『なぜ、あなたの弟子たちは、昔の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません。』ということだったと聖書は報告しています。

おもしろいと思います。彼らの派遣の目的はイエス様の調査であったはずですが、なのに、問題にしているのは弟子達のことです。これは、イエス様の許に来て、イエス様のことより弟子達のふるまい、特に食事の前に手を洗わないということを目の当たりにして、驚いてしまったということでしょう。我慢ならなかったというのが正しいかもしれません。

私も小さい時に祖母からよく「ごはんの前に手を洗いなさい」と口酸っぱく言われましたが、それは衛生面としつけの問題でしょうが、ここで彼らがこれほどまでにこだわるのは、手を洗わない行為が『昔の言い伝えを破っている』からでした。

「昔の言い伝え」とは、旧約聖書の「律法」を実際に生活の中で適応していく段階でこうした方が望ましいとか、更にこうあるべきだとかいう細則や解釈が時代を経て蓄積されてきたものです（ハラカーとかハラハーとか呼ばれたりするもの）。

この「食事の前に手を洗う」という行為も、本来の律法には祭司などが儀式や動物の犠牲の献げものをする時に身を清める行為として必ず為されなければならないものとして定められています。一般の信者たちが手を洗わなければならないとは決められてはいません。むしろ、それは後になってから、清めの行為としてそうすることが望ましいとされるようになり、更にはそうすべきだという戒めとして「言い伝え」られるようになったものでした。

ここでエルサレムから遣わされているファリサイ派の人々と律法学者たちは特にこの「昔の人（原文では「長老」）の言い伝え」を厳守することを自分たちのモットーとしていたのです。ですから、弟子達の行為を、言い伝えをないがしろにするものとして許せなかったのでしょうか。いかがでしょうか？

イエス様のことを調査に来ていた者たちが、弟子たちのそれも食事の前に手を洗わなかったというささいなふるまいに目くじらを立て、それがいかにも重大な問題であるかのように取り上げ、そのことでイエス様の弟子達への監督不行き届きを問題にしようとしている姿はあまりにも「小さい・偏狭な心・こだわり」を表しているのではないのでしょうか？逆に言えば、弟子達の方は、イエス様の教えを聞いてきた中で、もはやそのようなこだわりをそれほど持たなくなっていたのでしょうか。

ただ考えてみれば、このようなことは今の私達にも起こることではないかと思えます。つまり、キリスト教ということの問題にする時に、その中心であるイエス様のことよりはその弟子である私たちクリスチャンの振る舞いや言動がことさら取り上げられるのです。それでキリスト教をうんぬんされるのです。

特にここでは「昔の人の言い伝え」に従わないことで問題にされています。私たちも先祖から続いている風習や風俗に従わないということで白い目で見られたり、祭りや宗教行事に積極的に関わろうとしないことであれこれ批判されたりします。そして、そのくせクリスチャンなのだから、愛の豊かな人なのだろうとか、なぜ赦してくれないのかと一方では要求されるのです。たまったものではありません。

もちろん、このことは私達自身でも気をつけなければいけないことであると思えます。即ち、イエ

ス様にこそ目を向けて行くべきであって、その弟子達であるキリスト者のふるまいや言動にことさら左右されないということではないでしょうか。

三、カウンターパンチ

そのようなファリサイ派の人々と律法学者たちの問いかけに対して、イエス様はその問いに答えることではなく、逆に質問を彼らに投げかけられるのです。

それが『なぜ、あなたたちも自分の言い伝えのために、神の掟を破っているのか。神は「父と母を敬え」と言い、「父または母をののしる者は死刑に処せられるべきである」とも言っておられる。それなのに、あなたたちは言っている。「父または母に向かって、『あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にする』と言う者は、父を敬わなくてもよい」と。こうして、あなたたちは、自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている。』です。

ある解説者は、ここでのイエス様の言葉を、ボクシングで言うカウンターパンチを繰り出されたようなものだと語っています。なるほどと思います。ファリサイ派の人々と律法学者たちの攻撃的な質問に対して、弁護するような答えを用意するのではなく、むしろそのように声高に彼らが問題にしている「昔の人の言い伝え」というテーマを、その質問を利用して問い直されたのです。

では、イエス様は何を伝えようとしておられるのでしょうか？

旧約聖書の律法（十戒）には「父と母を敬え」（第五戒）があります。それは私たちもよく知っています。この律法から言えば、当然、その子供たちには親への扶養義務があります。そのために生前に財産も相続するのですが、しかし、「昔の人の言い伝え」を用いると、その子供が財産は受け取っておいて扶養義務に関しては「保留」できる抜け道があったのです。それは、財産の一部を『神への供え物（正式にはコルバンと言います）にする』と宣言してしまえば、その財産は神様に属するものと見做されて、遺産に含めなくてよいということであったのです。そして親の扶養義務もなくなると。しかもその後、息子が本当に神殿に献金するかどうかは別でうやむやになってしまう事が多かったのです。

それでは「昔の人の言い伝え」が、本来最も尊重すべき「律法」を守らなくて良い言い訳・詭弁になっているのではないかと、まさに『自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている』と。このようにイエス様は「言い伝え」の方を重視するファリサイ派の人々と律法学者たちの問題点を鋭くえぐられたのです。

結局、「昔の人の言い伝え」は自分たちの都合に合わせて律法を解釈してきたものです。当然、人間に都合良くできているものです。それを楯に取って人を非難することは、自分たちの都合や論理を人に押し付け、強要するための手段に過ぎないのではないか、神様に対しても人間の都合を押し付けようとする行為ではないかと言えるのです。それはまさに「罪（＝神様への反逆）」です。

私はこの箇所を読んでいて小さい頃のことを思い出しました。

農村に住んで居ましたから、村の鎮守のお祭りだとか、稲荷や山の神の祭りだと言われて、太鼓をたたかされたり、変な服を着せられたりしました。しかも、言われたように振る舞わないと、バチがあたるとか、たたりが来るとか言われました。そうしない者たちは村八分に会うのです。まさに「昔の人の言い伝え」が金科玉条のように考えられ、それが正しいとか間違っているとかに関係なくあたかも犯すべからざる戒めのようになっているのです。

せめて、私達の信仰は、私たちが勝手に作った「言い伝え」なり伝統なりを必要以上に特別視しないようにしたいものです。

四、心が離れていては

イエス様は続けて、そのような人間の言い伝えを重んじ、本来の神様への信仰をないがしろにしている人たちのことを、旧約聖書のイザヤ書 29 章から引用して語られておられます。

即ち『偽善者たちよ。イザヤは、あなたたちのことを見事に預言したものだ。「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしくわたしをあがめている』と。

まさに「人間の戒めを（神様の）教えとして教えている」欺まんを断罪しておられます。そのようなあり方は「口先の（＝表面的な、形だけの）」信心であって、「心が」伴っておらず、本心は神様から「遠く離れて」しまっていると指摘しておられるのです。まことに鋭い言葉だと思います。このイエス様の言葉は、ただファリサイ派の人々と律法学者たちだけへの言葉ではありません。私達への問い掛けでもあります。

この礼拝のここに参加しながら、私達の礼拝が口先だけの讃美や信仰になっていないだろうか？ 表向きに整然とされ、形だけが取り繕われた、形式的な礼拝に陥っていないだろうか？

心から主に讃美の声を上げ、心から悔い改め、そして心からみ言葉に聞き従おうとしているだろうか？

ここでイエス様の言葉『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』（マタイ福音書 22 章 37 節）を思い出さない訳にはいきません。

五、主に近づくためには

私達の心が遠く離れて行かないようにイエス様が教えて下さったことが「祈り」です。

私達は「祈る」ことによってのみ、神様に近づくことができます。良き香りや動物のささげものや献金では神様に近づくことはできないのです。一人一人が祈りの心を持って主の前に心からひざまずく者でありたいと願っています。

(礼拝説教より抜粋)